

平成 23 年 5 月 10 日現在

機関番号：24403
研究種目：基盤研究(c)
研究期間：2008年～2010年
課題番号：20530518
研究課題名(和文) 介護事故リスクマネジメント活動に関する効果検証方法の開発
研究課題名(英文) Developing a method to evaluate the effectiveness of accident prevention measures and risk management activities in long-term care facilities
研究代表者
関川 芳孝 (SEKIKAWA YOSHITAKA)
大阪府立大学・人間社会学部・教授
研究者番号：10206625

研究成果の概要(和文)：

介護老人福祉施設におけるリスクマネジメント活動における効果検証方法について考察した。開発した効果検証シートを利用し、リスクマネージャーが、事故分類ごとに事故リスクを定期的に評価し、とられた対策について効果検証を繰り返すことにより、介護事故が減少した。経営者に対する報告と意見、現場職員による効果についてのコミュニケーションを関連させて、これを効果検証のプログラムに位置づけたことが、リスクの低減につながったものと思われる。

研究成果の概要(英文)：

We discuss a method to evaluate the effectiveness of risk management activities in long-term care facilities for the elderly in Japan. We discovered that the numbers of work-related accidents at these care facilities decreased after the following measures were implemented: A risk manager categorized accident risks and evaluated them according to the type of accident on a regular basis, by using the evaluation sheet that we had developed. The risk manager also similarly evaluated the effectiveness of the preventive measures adopted. We studied the reports sent to and feedback received from the owners of these facilities and the staff communications regarding this program. By consolidating these views, we concluded that the evaluation program was effective in lowering accident risks in such facilities.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,800,000	840,000	3,640,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会福祉学

キーワード：介護事故、リスクマネジメント、効果検証

1. 研究開始当初の背景

(1) 介護保険の指定基準として、リスクマネジメント体制の確立が義務付けられているが、依然として事故は繰り返されている。リスクマネジメント委員会において、事故の原因と対策を検討しても、同様な事故が繰り返し発生する。

平成十七年に科学研究費補助を受けて行った「介護施設におけるリスクマネジメント実践に向けた実証的研究」では、大阪府下の介護施設に対する調査を行ったが、大部分の施設においてヒヤリハット報告の収集および事故データの分析検討に取り組んでいるものの、効果検証および業務への反映が不十分であることが明らかになった。個別ケースにおいて、ケアプランの利用者アセスメントにおいて、とられている対応についての見直しが行われることがあるが、特定の事故類型について、とられた対策の効果検証は十分でないのが現状といえる。

(2) 介護の事故の特性を分析すると、職員のヒューマンエラーのみならず、利用者の行動、業務環境、施設運営のありかたなど、多面的かつ複合的な原因によって起きている。そのため、所定の再発防止の対策を講じても、事故発生をゼロにすることは困難である。そして、リスクマネジメントの活動も、必ずしも事故発生をゼロにすることをめざすものではない。

問題なのは、リスクマネジメント活動を推進し組織的に事故防止の体制を構築することにより、より効果的な対策を講じることにより、施設における事故による損害発生リスクを可能な限り小さなものにコントロールできているかである。こうした問題関心から、あらためて繰り返される事故に対する対策について、効果検証の方法を開発し、施設におけるリスクマネジメント活動により、事故の発生件数を許容範囲にまで減少させることが必要と考えた。

2. 研究の目的

研究計画においては、複数の特別養護老人ホームから協力をえて、事故類型ごとの発生頻度をベンチ・マークとして決定し、これを比較指標としつつ、事故件数が低い施設の実践に学ぶ仕組みを構築しようと考えた。まず、それぞれの施設における事故類型ごとに事故防止の

取り組みを聞き取り、事故防止のために有効な優れた取り組み(ベストプラクティス)を検討する。そうした対応をとる施設においては、事故防止効果が高い(発生頻度が低い)はずである。この施設における発生頻度をベンチ・マークとし、これらの施設の実践に学びながら、自らの施設の取り組みについて効果検証を行うことが、事故防止につながるものと考えた。

3. 研究の方法

(1) 特別養護老人ホームにおけるリスクマネジメントに関わる職員と研究会をもち、事故類型ごとにとられた対策についての効果検証シートを作成し、これをもとに、半年に一回効果検証を行うことにした。

実際の効果検証は、毎年前期と後期に、リスクマネージャーが、提出された事故報告書をもとに、事故類型ごとに事故件数を整理し、とられた対策についての効果検証を行うものにした。発生した事故に対してとられた対策に効果があれば、事故は減少するはずである。半年ごとに効果検証を行い、前の期間と比較し事故が減少したか、どのような対策がとられており、今後の課題は何かを把握できる効果検証シートを作成した。

効果検証シートの活用は、こうした効果検証の結果を、施設長や理事長になど経営者に報告することをねらいとしている。経営者が、こうした報告を受けて施設全体のリスクと対策について把握でき、どこの部分の対策に課題があるかを知ることができる。リスクマネージャーの側からすると、経営者にリスクを見えるように可視化することが大切と考える。

(2) 効果検証シートは、転倒事故などの事故類型を、場所ごとに区分し(中分類)、事故当時職員が近くにいたかどうかにより区別した上、さらに具体的な事故形態を細分化した。

たとえば、効果検証シートでは、転倒転落の事故分類について、居室においた職員が近くにいない場合において「ベッドからのずれ落ち・立ち上がりによる転倒・転落」という事故形態について、順次「事故件数」、「発生頻度」、「事故の重大さ」、「リスクの度合」、「実施済みの対策」、「対策の効果」を記入するものとした。

「リスクの度合い」とは、リスクの大

きさを表したものであるが、「発生頻度」×「リスクの重大さ」として考えた。ここでの「リスクの重大さ」とは、想定される損失の大きさをいう。

本来は、リスクの重大さは、「死亡事故であれば、〇〇〇万円以上」などと、金額で示すべきところであるが、現場職員の意識を考慮して、事故が起これば「死亡」事故、「長期入院・寝たきり」となってもおかしくない事故などとして表記することにした。

さらには、リスクの度合いが大きいにもかかわらず、リスクマネージャーが、対策が十分に講じられているとはいえないと評価した場合には、なお大きなリスクが残っていると考えられる。そこで、これを「残存リスク」として数値化し、警告するものとした。

また、効果検証シートでは、こうした「実施済みの対策」、「対策の効果」、「残存リスク」を考慮して「今後の対策」を決定する。対策がとられた期間において、結果としてどのような事故が発生しているかについて、「処置結果」として記入することにした。発生件数は少なくとも、そして対策が効果的なものであっても、「重大事故が発生」したことがあるからである。「特記事項」を設け、リスクマネージャーがみて、これ以外に特別な事情があれば記入するものとした。

(3) 研究会では、効果検証方法の検討にあたっては、①事故パターンを分析②検証方法を検討③効果検証ツールを開発④ツールについて有効性の検証を行った。こうした開発されたのが、介護事故再発防止対策の検証シートである。研究会に参加するリスクマネージャーにおいても、以下の効果検証のシートによる事後アセスメントは、リスクマネジメント活動を実施する上で、以下の理由から有効な手法であるとの評価が得られた。

まず、現場のレベルでは、①優先して見直すべき対策が把握できる。②残存リスクが数値化されるので、潜在化している事故リスクについて、職員の共通理解が可能となる。

リスクマネージャーからは、①施設における事故リスクの全体を把握でき、対策を重点化できる。②現場に対し、効果が十分とはいえない対策を指摘し、改善を求めることができる。③各部門の責任者と、残存する事故リスクに対し、共通理解をつくることことができる。

経営者らは、①現存する事故リスクを知ることができ、事故防止についての経営課題を把握できる②事故防止につい

て、現場職員やリスクマネージャーと共通理解の形成に役立つ。③施設におけるリスクマネジメントの組織体制を強化し、大事故につながるリスクをコントロールすることができる、と考えた。

4. 研究成果

(1) 研究会における幾つかの特別養護老人ホームが、2009年10月から2010年9月末までの一年間について、効果検証シートを活用し、リスクマネジメント活動に取り組んだ。効果検証シートでは、繰り返し発生している事故類型が明らかになり、この期間に実施されていた対策についての効果検証をすることにより、対策の見直しに取り組むべき残存リスクの高い事故類型を特定できた。こうした事故類型について、リスクマネージャーは、現場の介護職員と協議の上、実施済みの対策の問題を確認し、再発防止のために今後とられるべき対策を決定し、実施した。

(2) その結果、協力いただいた特別養護老人ホームにおいては、こうした効果検証によって、事故件数が減少した。

(3) リスクマネージャーは、事故が繰り返し発生しており、対策の見直しが必要な事故類型が明らかになり、対策が立てやすくなる。すなわち、経営者に対する報告・説明でも、リスクマネジメント活動の成果を、数値化して説明できる。経営者に対しリスクマネジメント活動効果検証報告書を説明する場を設けることにより、リスクマネジメント活動に対する経営者の理解と協力が得やすくなるとともに、経営者の意見や要望を受けることが、活動推進のモチベーション維持にとっても有意義と考えている。

事故を減少させるためにとられた対策は、必ずしも目新しいものではない。いずれも、事故防止にとって、巡回の強化、見守りの徹底、座位姿勢の確認・修正など、基本的なものばかりである。事故件数を減少させるためには、リスクマネージャーは、事故防止について職員集団とコミュニケーションをとりながら連携を強めて、職員集団と協力してとるべき対策の徹底を心がけることが大切である。こうしたことの実践により、事故が減少している。

(4) 効果検証シートからは、重大な事故リスクがどこにあるのか、残存リスクとして数値化することにより、把握可能

となる。発生件数を減らす、残存リスクを許容できる程度に下げるといったリスクマネジメントの取り組み目標は、現場の職員にも、わかりやすい。リスクマネージャーにおいては、現場の職員集団において、事故防止について共有された目標を達成するために協力関係をつくること、事故減少につながるものと考えている。要するに、事故防止に向けたチームワークの力を高めることにより、職員集団として事故防止に必要な対策の徹底を図ることができると、事故は減少する。経営者、リスクマネージャー、現場の職員集団において、事故減少の期待が類似・共有されることが、事故防止に有効であると考えられる。また、経営者への報告や経営者からの助言や要望が、現場組織に対するリスクマネージャーの専門助言機能(スーパービジョン)を強化し、残存リスクという形で数値化された課題に対し、現場職員のコミュニケーションが活性化したことが、事故発生件数の軽減につながったものとする。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 13 件)

- ① 関川芳孝、基礎から学ぶ保育リスクマネジメント講座⑪リスクマネジメント委員会は計画的に活動を行っていますか、保育の友、査読なし、59 巻 3 号、2011、26-27
- ② 関川芳孝、基礎から学ぶ保育リスクマネジメント講座⑩リスクマネジメント実施体制の整備に取り組もう、保育の友、査読なし、59 巻 2 号、2011、26-27
- ③ 関川芳孝、基礎から学ぶ保育リスクマネジメント講座⑨求められる園長・所長のリーダーシップ、保育の友、査読なし、59 巻 1 号、2011、26-27
- ④ 関川芳孝、基礎から学ぶ保育リスクマネジメント講座⑧リスクマネジメントの取り組みに向けて②、保育の友、査読なし、58 巻 14 号、2010、26-27
- ⑤ 関川芳孝、基礎から学ぶ保育リスクマネジメント講座⑦リスクマネジメントの取り組みに向けて①、保育の友、査読なし、58 巻 13 号、2010、26-27
- ⑥ 関川芳孝、基礎から学ぶ保育リスクマネジメント講座⑥保育におけるリスクマネジメントの基本的視点、保育の友、査読なし、58 巻 12 号、2010、26-27
- ⑦ 関川芳孝、基礎から学ぶ保育リスクマネジメント講座⑤リスク対応についての考

え方、保育の友、査読なし、58 巻 11 号、2010、26-27

- ⑧ 関川芳孝、基礎から学ぶ保育リスクマネジメント講座④保育における事故のリスクについて考えてみよう その 2、保育の友、査読なし、58 巻 10 号、2010、26-27
- ⑨ 関川芳孝、基礎から学ぶ保育リスクマネジメント講座③保育における事故のリスクについて考えてみよう その 1、保育の友、査読なし、58 巻 8 号、2010、26-27
- ⑩ 関川芳孝、基礎から学ぶ保育リスクマネジメント講座②リスクマネジメントが必要とされる理由、保育の友、査読なし、58 巻 6 号、2010、26-27
- ⑪ 関川芳孝、利用者本位の改革は進んだか月刊福祉 100 年記念号、査読なし、93 巻 2 号、2010、218-219
- ⑫ 関川芳孝、地方の時代、社会福祉法人の存在意義、月刊福祉、査読なし、93 巻 4 号、2010、12-17
- ⑬ 関川芳孝、保育書におけるリスクマネジメント 総合ユニコム、子育て支援事業の解説計画・運営実態資料集、査読なし、2009、96-107

[学会発表] (計 0 件)

[図書] (計 3 件)

- ① 荒木誠之他、信山社、社会保障法・福祉と労働法の新展開、2010、257-276
- ② 社会福祉学習双書編集委員会編、全国社会福祉協議会、社会福祉概論Ⅱ 福祉行財政と福祉計画・福祉サービスの組織と経営、2009、110-160
- ③ 関川芳孝、全国社会福祉協議会、保育士と考える実践保育リスクマネジメント講座、2008、226

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

○取得状況 (計 0 件)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

関川 芳孝 (SEKIKAWA YOSHITAKA)
大阪府立大学・人間社会学部
研究者番号：10206625

(2) 研究分担者

なし

(3) その他 研究協力者、北九州市福祉施設経営研究会

